

1. はじめに

- ・通常の命令文では、(1)にある二つの条件が満たされなければならない。

- (1) a. 命令文内容で表現されたイベントが起こる前に発話される
b. 話者の好みに沿った命令文の発話がなされる

(2) 食べろ！

- a. 文脈：聞き手がまだ何かを食べていない状況
b. 話者の好み：聞き手が食べるという行動を起こすこと
e.g. (野菜が嫌いでまだ野菜を食べていない聞き手に対して)「食べろ」

- ・これに対し(3)の命令文では、(1a,b)の条件を満たしていない。

(3) 馬鹿言え！

- a. 文脈：聞き手がすでに、話者に対して何か馬鹿げたことを言った状況
b. 話者の好み：「馬鹿げたことを言うな。」(発話の字義通りの意味と反対)
e.g. (長年追い求めてきた目標に向かう途中の挫折時に) 聞き手「もう諦めちゃおうかな。」
話者「馬鹿言え」

- ・このほか、「嘘つけ！」や、若者の間で使用がみられる、「ふざける！」「ほざけ！」なども、同様の現象を示す例である。

- ・本発表では、(3)のような命令文を「反対命令文」と呼び、反対命令文について意味論、語用論の観点から分析する。

2. 分析

2.1 先行研究

- ・命令文における二つの制約 (Kaufmann, 2012)
 - Epistemic Uncertainty Constraint (EUC)
 - 話者の好み

・ Epistemic Uncertainty Constraint (EUC)¹

$[[OP]_{Imp}] = \lambda f \lambda g \lambda t \lambda P \lambda w. (\forall w' \in O(f_{CG(c)} \cup f, g, c_T, w)) [P(t)(w')]$,

presupposes: the precontext c' of c is such that for all $w \in CS(c')$:

$(\exists w' \in Bel'_{CS}(c'_T)(w)) (\exists w'' \in Bel'_{CS}(c'_T)(w)) [\neg p(t)(w') \& p(t)(w'')]$

(= the speaker believes that both $\neg p$ and p are possible)

➤ 命令文を “p!” とした場合、通常の命令文が発話された時点では、“p” も “not p” も、どちらも認識的に可能でなければならない(cf. Diversity Condition, Condoravdi 2002)。

(4) #“I know that you are going to do this no matter what, so do it also.” (Kaufmann, 2012 p.156)

・ 話者の好み

➤ 通常の命令文においては、話者の好み沿っていない発話は、特別な事情がない限り不自然になる (Kaufmann, 2012)。

(5) “Call Melli! #But I don’t want you to call her.” (Kaufmann, 2012 p.158)

2.2 反対命令文の分析

・ EUC の再定義

➤ Kaufmann(2012)は、未来志向である通常の命令文を分析するために EUC を考案していた。しかし、今回の研究で取り上げる反対命令文の観察から、命令文は発話より前に起きたイベントにも言及できることが分かる ((3)を参照)。このため、本研究では、Saito (2016)の提案を採用し、EUC は未来だけでなく、過去のイベントも考慮に入れられるものであると仮定する。(c.f. Saito (2016)は、EUC は Common Ground に基づいて評価されるものであるとすると、過去のことについても考慮できることを指摘している。)

→これにより、発話より前に起きたイベントに言及する反対命令文にも、分析を適用することができる。

・ EUC からの反対命令文の分析

→反対命令文では、発話がなされる前にすでに p が起こっており、not p の可能性が認識的に (epistemically) 残されていないため、EUC に違反する

(6) 馬鹿言え! =p!

文脈：聞き手がすでに、話者に対して何か馬鹿げたことを言った (=p) 状況

¹ Kaufmann (2012)は、命令文と modal 文の持つ共通点 (e.g. perceived lack of the truth value, …) に基づいて、命令文を performative modal を含む命題として分析している。EUC は、命令文を performative modal を含む命題として分析した Kaufmann(2012)が、命令文はどのような文脈で適切となるのかを分析する際に考案した制約である。

➤馬鹿げたことを言っていない(not p)という可能性は残されていない。

・話者の好みからの分析

→反対命令文は、話者の好みに沿っていない

(7) 馬鹿言え！

話者の好み：「馬鹿げたことを言うな。」(発話の字義通りの意味と反対)

➤発話の字義通りの意味と、解釈される話者の好みに沿っていない。

反対の意味解釈がなされる命令文は、EUC、話者の好みの両方に違反している。

提案：意味論段階におけるこの二つの違反が、語用論段階において反対の意味解釈を行うための信号として機能している。

2.3 語用論段階での分析

・ Grice の協調の原理(1975, 1989: 26)

➤反対命令文では、命令文内容で表現されたイベントがすでに起こっているにもかかわらず、わざわざ命令文として発話される。

→反対命令文は、量の公理²に違反している。

➤反対命令文では、字義通りの意味と、話者の好みの中に齟齬が生じる。このため反対命令文の発話は、真ではないと分かっている事柄を、発話者が敢えて発話していると考えられる

→反対命令文は、質の公理³に違反している。

➤協調の原理に基づいた反対の意味解約の生成

Step 1. 話者は協力的な会話のパートナーである。

Step 2. そのため、話者は何か役に立つ情報を提供しようとしているはずである。

Step 3. 発話された文は、命令文内容で表現されたイベントがすでに起こっているにもかかわらず、わざわざ発話されたものであるため、不適切である。また、発話された文は、話者の好みに一致していないことが文脈から分かるため、不適切なものである。

Step 4. そのため、その文は文字通りの内容を意味しない。

Step 5. そのため、話者は、言外の意味を補うことを望んでいる。この結果、字義通りの意味とは

² 量の公理：自分の貢献を（その場のことばばかり取りの目的のために）要求されているだけの情報を与えるようなものにせよ。自分の貢献を要求以上の情報を与えるようなものにするな。(Imai, 2009, p.47)

³ 質の公理：自分の貢献を真であるものにすべく努めよ。真でない自分が知っていることを言ってはならない。十分な根拠を持たないことを言ってはならない。(Imai, 2009, p.48)

異なる解釈がなされる。

2.3 通常の命令文への適用

- ・通常の命令文において、EUC と話者の好みに関して、あえて違反した文脈を想定した場合すると、通常の命令文においても、反対の意味解釈が生じる。

(8) 食べろ！

- a. 文脈：聞き手がすでに、何かを食べている状況
- b. 解釈：「(そんなんなら)食べればいいんじゃない。」＝皮肉
- e.g. (ダイエット中の聞き手が、こっそりおやつを食べている現場が見つかった状況)
話者「(そんなんなら) 食べろ！」

➤完全に反対の意味解釈が観察されるわけではないものの、皮肉的に反対の意味解釈に近づく。

- ・通常の命令文において、EUC と話者の好みに違反した文脈を想定した上で、継続性を表すアスペクト「ている」(Ogihara, 1998)を伴った命令文を観察すると、反対の意味解釈がより生じやすくなる。

(9) 食べてろ

- a. 文脈…聞き手がすでに、何かを食べている状況
- b. 解釈…「(そんなんなら)食べればいいんじゃない。」＝皮肉
- e.g. (ダイエット中の聞き手が、こっそりおやつを食べている現場が見つかった状況)
話者「(そんなんなら) 食べてろ」

➤継続性を表すアスペクト「ている」を伴わない場合よりも、反対の意味を解釈がなされやすくなる。

→アスペクト「ている」によってイベントの継続性が生まれ、命令文内容に表現されたイベントが、発話時以前から起きていたことが表面的に示される。これにより、反対命令文の特徴が強調されるため、反対の意味解釈が生じやすくなると考えられる。

3. まとめ

- ・反対の意味解釈を持つ命令文は、通常の命令文と異なり、意味論段階で EUC と話者の好みの反映における違反が起きている。
- ・上記の違反が信号となり、語用論段階で Grice の協調の原理に基づき、反対の意味解釈がなされる。
- ・命令文における反対の意味解釈は、実は限られた用例だけに見られるものではなく、文脈を設定すれば、通常の命令文にも共通してみられる現象である。

参考文献

- Condoravdi, Cleo. 2002. Temporal Interpretation of Modals. In *The construction of meaning*. ed. by David Beaver, Stefan Kaufmann. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Grice, H P. 1975. Logic and Conversation. In Cole P, Morgan J L (Ed.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts* pp41-58. New York, Academic Press.
- Kaufmann, Magdalena. 2012. Interpreting Imperatives. In *Studies in Linguistics and Philosophy*, Vol. 88. ed. by Lisa Matthewson, Yael Sharvit, Thomas Ede Zimmermann, Johan Van Benthem, Gregory N. Carlson, David Dowty, Gerald Gazdar, Irene Heim, Ewan Klein, Bill Ladusaw, Terrence Parsons. Netherlands, Springer Netherlands.
- Mori, Hideki. 2006. Three Types of Imperatives: Imperatives in Japanese and English, Existing or Potential Scale. *Gengo Kenkyu*. 129, 135-160.
- Ogihara, Toshiyuki. 1998. The Ambiguity of the -TE IRU Form in Japanese. In *Journal of East Asian Linguistics* 7, 87–120, the Netherlands, Kluwer Academic Publishers.
- Saito, Hiroaki. 2016. Past imperatives in Japanese. *The 24th Japanese/Korean Linguistics (J/K24)*, the National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), Tokyo, Japan.
- Wilson, Deirdre, Wharton, Tim. 2009. 最新語用論入門 12 章. Imai Kunihiko, Ido Ryo, Okada Toshihiro, Matsuzaki Yuki, Furumaki Hisanori, Arai Kyoko. 東京, 大修館書店.